

歯学部附属病院

摂食嚥下リハビリテーション外来

外来と訪問で「口から食べること」をサポート



外来には口腔外科の術後のフォローアップを中心に、年間200～300人の患者さんが受診する。レントゲンや内視鏡を使って、摂食嚥下機能の検査も行う。



歯科医師のほか、大学院の学生、歯科衛生士も摂食嚥下リハビリテーション外来のメンバーとして活躍。

戸原玄診療科長 ◎「口から食べられるということは、患者さんのQOLを大きく向上させます。また、介助する家族や周辺医療者の安心や安全をサポートし、幸福に貢献できるような医療を行いたいと思っています」

診療科DATA

診療科長	戸原 玄(とはら はるか)
診療スタッフ	歯科医師10人(他科と兼任)
対象	食べるのが遅くなった、やせてきた、食べこぼす、口の中に食べ物が残る、食事中にむせる、痰が出る、痰が増えた、喉がごろごろなる、風邪以外で熱が出ることもある、食べにくいものがある、喉の奥に食べ物が残る、食べ物がつかえる、飲み込みにくい、食べ物や胃液が逆流する、経管栄養を行っているが、口から食べられるかどうか知りたい方
嚥下機能検査	嚥下造影、内視鏡検査
摂食嚥下機能障害の治療	間接訓練と直接訓練、歯科的対応、口腔ケア、特殊な補綴の対応(PAP：舌接触補助床)、栄養摂取法
訪問診療	東京医科歯科大学から半径16km以内



戸原診療科長が自ら開発した、口を開く力測定器(特許出願中)。口を開ける力具合で嚥下障害のスクリーニングができる。

摂食嚥下リハビリテーション外来では、食べ物を咀嚼して胃に送るまでの機能が低下してしまった人や、経管栄養の患者さんが少しでも口から食べられるよう、摂食嚥下機能の評価はもちろんのこと、摂食指導を行っている。

患者さんの9割程度は高齢者だが、舌がんなどの口腔腫瘍術後の患者さんや、パーキンソン病、ALSなどの神経節疾患、脳血管障害、呼吸器疾患や頭部外傷などで、摂食嚥下機能に障害をきたす患者さんも多い。過度な安静や活動量の低下により摂食嚥下機能が低下してしまう「廃用症候

群」の患者さんも少なくないと戸原玄診療科長は指摘する。

「寝たきりで体を動かさないでいると、毎日数%の筋肉が衰えてしまいます。さらに会話も減ることにより、心身ともに衰弱して喉の機能も衰え、誤嚥性肺炎につながることも多々あります。そのようなことを防ぐため、当外来では摂食嚥下機能の評価や訓練指導などに取り組んでいます。例えば、訓練以前に、食べるときの姿勢を正すだけで嚥下機能が大幅に回復することもあるのです」

毎週、月曜日から金曜日までの外来診療とは別に、訪問診療も行っ

ている。訪問診療の患者数は年間で800人にも上る。

「高齢者施設や在宅療養の訪問診療の際には、実際に食事をしている様子を観察して、介助を行うヘルパーさんや家族に対して指導を行うこともあります」

訪問診療では、患者さんの病状や生活環境などに合った治療や口腔ケア方法の指導が可能となる。摂食嚥下リハビリテーション外来では、地域のかかりつけの医師や歯科医師、訪問看護師やケアマネージャーなどと連携しながら、継続した診療を進めている。

B